

雨飾り

田久保英夫



講談社

雨飾りあまかざり

一九八〇年六月三〇日 第一刷発行
一九八〇年九月一〇日 第二刷発行

著者——田久保英夫たくぼひでお

© Takubo Hideo 1980, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—四四—二三(大代表) 振替東京—五〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一四五〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

I 鍵束	5
II 深い淵	39
III 冬屋敷	91
IV 暁まで	125
V 仮装	157
VI 重い砂	199
VII 雲の切れ目	
VIII 血の譜	315

装画・棟方志功

カバー 板画「湧然する女者達々 湧然

の柵・没然の柵」(一九五六)

扉カット 版画「星座の花嫁 星座の絵」

(一九二八)

雨飾り

I
鍵
束

西日が金朱色の雲母のように射すホームへ、電車が入ってきた時、女の影がふつとその方へ跳ぶように動いた。麻屋の眼には、一瞬そう見えた。

薄碧い木綿のサフアリとパンタロンを着た若い女で、掌の中の手帖みたいなものを、しきりに眺めていたのが、こっちの壁際から、人影ごしに眼に入った。電車の響きが聞えると、急に顔をあげ、傾いた陽の逆光を切るように動いて、見えなくなった。柿色の重い車体が亘りこみ、人びとが扉口へ集まる。

麻屋は思わず凭れていた壁から、肩を起した。初秋の夕昏れて、そろそろ通勤の退け時^{どき}が始まり、あたりは混んできている。眼のまえを、いくつも人の影が通りすぎ、そのむこうに女の碧い服の色を探すが、見えない。別に人がさわぐ気配もない。

麻屋は自分も扉口へ行つて、乗ろうか乗るまいか、ためらった。しかし、扉は閉まり、窓ガラスが鈍い鏡のような反射で、ゆっくり流れた。彼は妙な期待とも不安ともつかない気持で、線路を見おろした。銹色の石敷きと、刃^{やいば}のような肌のレー^{レール}ル。それに煙草の吸い殻や飴の包み紙。そのほかに何もない。女が跳んだように見えたのは、陽の逆光と車体の影が交錯したせいだ。自分がどうかしているのか。

彼は自分をばからしく感じて、線路を眺めた。いつもの不眠と、そのために飲むウオツカが、ま

だ軀に残っていて、四肢が重い。そのくせ、頭の内側の一点だけ光る針のように、ぴいんと張りつめている。たぶん、嫌な電話がかかってきて、急いでアパートメントを出たせいだ。近くの赤電話にいたので、今から伺いたい、と相手が言うから、これから出かける、と断わった。本当に波津子のところへ行く予定があった。いつも車を拾う通りの角に、赤電話があるので、そこを避けて国電の駅まで歩いた。

刃色のレール面に、蒼い夕空が映っている。そのへりが微かに紅い滲みをつくっている。そこだけ桜の花びらを、一列にならべたようだ。桜の花びらはレールの光る磨耗面に、無数に敷きならべられ、ホームの屋根の下、夕昏れの陽かげへ朧ろに消えている。それは不思議に遠い憧れのような気分をよび醒ます……。

麻屋は大学の頃、実際にこんなホームから女が跳ぶのに出会ったのを、思い出した。やはり都心だが、もっと高架のホームで、友人と古本屋街を廻った帰り、そこで電車を待ちながら立話していると、ちょうど視線の方向に、中年の女がいた。皺だった銀鼠色の服を着て、あまり人けないホームの端にいたが、車輛の音がすると、いきなり線路へ跳んだ。すこしその間合いが早すぎるようだった。電車は急ブレーキをかけて、軋みを立てたが、眼のまえをホームの半ばまで走りぬけてしまった。

とつさに自分の見たものが、信じられぬ気持でいると、人が集まってきた。電車はなかなか動かず、下の線路の方で、何人も駅員の声をした。車輛を点検するらしい小さな金属音も聞えた。やつと電車が走りさると、錆色の石敷きの上に、檻樓のような塊りがあつて、駅員が藁をかけようとしていた。まだ真昼の日光を浴びて、血斑の入った生白い脂肪質が、石床にはね散っていた。

あくる日の新聞の短い記事に、女は既婚者で、男関係のため、と出ていたが、そんなことで線路

へ跳ぶ情念に、しばらく頭を占められた。

「危いですよ、そんな端に立って。」

不意にうしろから、聞きおぼえある男の声がした。振りかえると、やや離れた鉄柱のわきから、さっきの電話の相手の清瀬が笑いかけている。今の電車に乗ればよかった、と思わず悔んだ。しかし、その遅れて、相手とたまたま会ったのか。アパートメントの近くに待っていて、後からきたのか。

「何度呼んでも、気がつかなくてね。」

清瀬は穏かな笑顔で、近づいてきた。この相手はいつも麻屋五郎という名ではなく、戸籍の名を呼ぶ。もう何年も、筆名の方がなじんでいるので、うっかり聞きのがすのだろう。麻屋とは、母方の郷里の家が北陸の麻問屋で、そう呼ばれたことから、自分でつけた姓だが、他人も自分ももうほとんどそれで通っている。

「後からついてきたの？」相手に訊くと、

「とんでもない。」

清瀬は中年の色つやの悪い顔を生真面目にして、手を振った。

「私もほかへ廻らなきゃならないんで、急いできたら、そこにいるのが見えたんですよ。」

清瀬とは何年ぶりだろうか。前より眼じりの皺も深く、小柄な軀をつんだ紺の背広も、擦れて織目が毛羽だっている。この相手がこちらを本名で呼ぶのは、大学の卒業前後に、霞が関の官庁にいた頃、いっしょだったからだ。七つ八つ年上で、領事官試験も通り、自分たちの仕事の区分の主任だった。自分は在学中、臨時の銓衡で入ったが、その省はアルバイトは許さないもので、ほとんど大学へ出ず、いわゆる外交官試験と呼ぶ上級職のテストを受けよう、と思っていた。

清瀬の声を聞く時の不快は、この頃の記憶からくる。だが、単純に不快と言えるかどうか。稀にはこっちから清瀬を呼び出そうかと、思うこともある。何か奇妙に屈折した感情だ。しかし、そんな感情は、清瀬の方がずっと根深いに違いない。清瀬はこちらより半年前に省をやめたが、そのきっかけは自分がつくった。それから、もう干支の年もひと巡りするほど時がたつが、きまって二年ごとに、電話とか手紙とか会いにくるとか、清瀬の方からやってくる。清瀬は省をやめてから、文書作成で経験した印刷関係の勤めを主に、いろいろなことに関係している。

「ちよっと。せつかく会ったんだから、話を聞いて下さい。」

清瀬はまた微笑を見せて言った。

「急ぐんだよ。」

いつからこんなふうに、お互の言葉遣いに変化したのか、と麻屋は意識した。

「いや、ほんのわずかの間で。ちよっと、こっちに腰かけましょう。」

清瀬はうしろを振り返り、壁際の椅子の方へ行きかけたが、急に階段を下りた。それはすこし図々しい態度で、こっちがついてくるという自信さえ見えた。麻屋はそれが業腹だったが、やはり階段を下りた。

そのひろい踊り場の右側に、カウンターと止り木の椅子だけのコーヒー・ショップがあつて、清瀬は躊躇^{ためら}らいもなく、そこへ入った。止り木には二三人の客がいるだけで、清瀬はさっさと一番奥の椅子へかけ、こっちを眼で招いた。

「今度、うちでも大手を真似て、制作部門をつくりましてね。」

無愛想な若いコックが、手あらくコーヒーの茶碗を卓上へ置くと、清瀬はそれを口に運びながら、言った。

「宣伝雑誌やパンフレットのうけ負いですが、原稿をお願いしたいんですよ。」

「今はだめですよ。軀の調子がわるくて。」

麻屋はそんなことを口実に、また何度もやってくるのではないかと用心した。何年か前にも、そういうことがあった。

「五回つづきですが、大した分量はいらないんですよ。かなり謝礼も出せますし。」

「今はとても。本業の方もできないんです。」

それはあながち嘘でもない。肝心の小説の約束も、ひと月延ばしになっていた。これは約束の先方に悪いだけではない、どこか鳩尾の内側に、燻る火種でも抱えている気持だった。

「まだ、家庭の方は片づかないんですか。」

清瀬が煙草を口にくわえ、煙に眼をしかめながら言うとき、思わずその眼を見た。この前会った時、家庭のことを話題にしたろうか。それとも、どこから聞き出したのだろうか。

「それは君に関係ないでしょう。」

「さあ、あるんじゃないですか。ありませんか。」

清瀬は皮肉の影もなく、微笑をむけた。この男の眼は大きくて、白目が黄色く濁っている。かすかに赤い毛細血管も浮いている。しかし、黒目はきびきびと動いて、頭脳の巡りの確かなことを感じさせる。それを見ると、自分がもう三年も、妻や息子と別居し、アパートメントの七階に一人暮らししているのも、相手にどこか関係があるような気がしてきた。

「人間のあいだには、めったに無関係なんてことはないんですよ。こうしてる間に、インドで一人の子供が餓死しているとすれば、それは何らかの意味で、私のせいですよ。」

清瀬はすこし粘るような感情移入で言ったので、唾がこっちの卓上へ飛んだ。これと似た言葉

を、前にも聞いた気がして、麻屋は自分から言った。

「無関係な個室で、物語だの女だの、考えてるのは、小説書きの私だけです。そうでしょう。」
すると一瞬、清瀬はその口調に反撥したように、臉に血色をのぼらせ、こつちを陰しく見つめた。

「そう。人事^{ひとごと}じゃなく、あなたは苦しむべきですよ。他人のためにも、自分のためにも。」

麻屋はこの狭い調理場で火を使うせいか、真夏のような暑さを感じた。さつき椅子にかけた時から、眼の下や顎すじに汗が滲んで、指でこすり落していた。

「出ましょう。」

そう言つて、彼が止り木から下り、若いコックに代金を払おうとすると、

「いやいや。」清瀬がつよく手を押しとどめたので、そのまま扉のそとへ出た。

わずかな間に、改札口の構外はすっかり暮れきつて、いくつもの外燈の明りが眼についた。彼はこれから清瀬と一緒に、電車に乗るのを面倒に感じた。

「じゃ、僕は時間が遅れたので、車を拾います。」

扉を出てきた清瀬に言うと、

「ああ、すみません。」さつきと打って変つて、相手は卑屈な声音になり、こつちの腕に手をかけた。

「じゃ、原稿はだめですか。」

彼が頷くと、清瀬は顔を近づけて、早口に言った。

「それじゃ、今度は諦めます。その代り、と言っちゃ何ですが、お願いがあります。娘の就職のことですよ。また、電話します。」

麻屋は言葉を返せば、その話にひきこまれるので、黙って、それを宙で払うように手を振り、改札口の方へ歩いた。

タクシー乗り場のある舗道へ出ても、清瀬と会った後の苦味^{にが}が、軀の中に尾をひいていた。そこには怖れさえあった。相手が妙な感情移入の口調で、「苦しむべきですよ。」と言った言葉もまだ響き、彼はつよい反撥を感じてきた。誰が苦しむような顔などするものか、と思った。そんな深刻そうないい恰好はごめんだ。彼はすこし冷静な気持をとり戻すと、駅にならぶ明るい灯火の食品売場を眺めた。

そこはあまり規模の大きくない百貨店で、地下鉄の入口のわきに、オレンジや桃などの山積み、売台の上で光を浴びている。麻屋はそこへ行くと、女子店員に、棚の上のマスクメロンを指し、

「二個、下さい。」と言った。

女子店員がそれを箱へ詰め、包装していると、彼は手前の段ボールの開いた箱の中に、紅紫色に熟したイチジクが、びっしり入っているのを眼に入れた。

「これも、ひと箱。」

「ひと箱ですか。」

若い女店員は腫れぼったい臉をあげて、びっくりしたように見返した。こんな腐りやすい果物を、ひと箱も買う者はいないに違いない。

「ええ。両方とも配達にして下さい。」

女子店員が出す伝票に、彼は妻の由子宛の住所を書いた。もう一年近く家へ帰っていないが、籍などの結着も義兄から言ってきたので、あまり延ばせないだろう。マスクメロンは七歳の息子の好物で、イチジクは静岡の実家の庭に木があって、由子が食べ馴れた果物だ。しかし、今にそれを

ひと箱も買った自分に、内心ですこし驚いた。

「これ、ほんとは木の実じゃなくて、花の袋なんですってね。この中の肉がほんとは花の集りなんですって。」

まだ結婚当初、静岡の実家へ一緒に行った時、由子は食べながら、暗紅色の雌花が集まる肉を、剥き出して見せた。その時、彼は妻がそれを食べるのを初めて見て、実家へ帰ると、由子は言葉も動作もすこし野蛮になるのではないか、と思った。形よく肉づいた唇で、その身にむしゃぶりつき、前歯で、果皮から削ぐようにすると、新聞紙の上へ無造作に皮を捨てた。唇の端や頤に、雌花の粒がこびりついたまま、しばらく忘れていた。

一度家で、静岡から送ってきたものを、盆の上から、自分に投げつけたことがあった。由子は短大の頃から、実家の織物工場を手伝ったりして、華奢な上膊に意外に筋肉がつき、力がある。投げると、障子をその実が貫いて、いくつも穴があいた。一つだけ、こっちの腿にあたって、潰れたまま畳へ落ちた。その時、五歳の息子が面白がつて、同じように真似て、抛り出した。

タクシー乗り場の方へ戻ると、十人ほど行列ができていた。その後につくと、舗道ぎわに、百貨店の食品輸送車が二台ひっそり停り、生魚でも運び出したのか、水溜りが光っている。麻屋はその傍に立ちながら、自分の中に、まださっきの清瀬の眼が消えずにいるのを感じた。それはうすい毛細血管の浮いた眼、妙に邪魔っけな感じの眼だ。

彼はそれを押しやるように、水溜りに灯火の碎片が映っているのを眺めた。とろんとした黒い水溜りに、小石が一つ濡れて見える。彼は不意に何の理由もなく、その小石がひどく官能的なものであるのに、眼を惹かれた。

この小石はどこからきたのだろう。どこに生じ、なぜこの水に浸っているのだろう。なぜ小石が

あり、見ている自分がいるのだろう。

麻屋は自分も、その石の沈黙の中に入りこみたい渴きを感じて、じっとそれを見下した。

空の闇に、高台の繁華な坂道の明りが、朧ろな虹のように投影している。裏手に、戦前の旧市内からの花街や寺院のある商店通りで、うす暗い寺の石垣をぬけると、また崖下の賑やかな小路へ出る。

麻屋は小路のかどで、車を下りた。その軒並の煉瓦色のひろい日除けの出た店が、波津子の家だ。美容院らしく唐草の飾りがついた扉口のガラス窓のむこうに、電灯が付き、鏡のまえで人影が動くのが見える。今日は休み、と聞いていたので、不審な思いで、路地を裏口の方へまわった。

崖に面した裏の扉口で、彼はポケットから、鍵の束をとり出した。いつも表が開いている時は、裏口の鍵は閉まっている。彼は煤けた軒灯の光に透し、ホールダーに通した鍵の中から、その扉のものを探した。自分のアパートメントの鍵。仕事部屋のロッカーの鍵。自分の家の玄関の鍵。車の鍵……。意外に自分の暮しは鍵にとり巻かれている。家の玄関と車は、いま由子しか使わないので、両方の鍵がすこし錆びている。

扉をあけて、狭いたたきへ入ると、すぐ珠のれんのむこうは板敷きの部屋で、ソファや卓子が、所せましと置いてある。波津子と、その友人の美容技術者の里枝と、いちばん若い助手のタミ子などが休む場所だが、ここは電灯がついていないから、亜麻色のメッシュのカーテンごしに、店の明りが漏れてくる。鏡のまえの椅子にかけた四十年配の女と、その髪に櫛をあてている波津子の姿が見える。